

早稲田大学フェンシング・体操・自転車部におけるスポーツビジョンの研究

The research on sports vision of Waseda university Fencing, Gymnastics, Bicycle club

1K05A150

戸田 志帆

指導教員

主査 太田章先生

副査 葛西順一先生

【緒言】

スポーツビジョンとはスポーツをする際に必要な視覚能力のことである。スポーツを行う状況というのは、自分や敵、ボールや用具などすべてが動いている特殊な状況が多く、日常生活の状況とは違うので、視覚能力も単純に見るという行為だけでなく、動いているものを見たり、視線を素早く切り替えたり、視野を広く持ったり、瞬間的にものを見たりする能力が必要となってくる。人間は外界からの情報収集の80%以上を眼に依存していると言われていた。これまでは視力といえばフォーカスのことでしたが、それ以外の動体視力、瞬間視、眼球運動、周辺視などの「見る能力」が、最近、注目されるようになり、スポーツにおいて、これらの重要さが改めて認識されている。

スポーツビジョンは各スポーツ種目において、必要性の高さなどに違いがあると言われていた。そこで本研究では、フェンシングと体操と自転車の3競技に絞って、スポーツビジョンの役割とスポーツビジョン能力に影響を与える要因を調べた。また、その中で考えられる競技別、経験年数別、競技レベル別に比較した。

【方法】

被験者は早稲田大学フェンシング部13人・体操部10人・自転車部7人に所属する男子計30人である。測定は、アシックス社がスポーツビジョンの第一人者である石垣尚男監修のもとで作った SPEESION というソフトを用い、動体視力・眼球運動・周辺視野・瞬間視の4つのスポーツビジョンを測定した。

また、同時に行ったアンケートでは、静止視力・各競技の経験年数・自分の競技での最高成績(大学入学後)・その他のスポーツ経験について回答してもらった。

【結果】

測定結果では周辺視野と瞬間視の能力において、被験者の9割が標準以上、また6割が競技者レベルの能力を有しているという結果になった。眼球運動と動体視力においては3競技とも標準レベルの能力であるランク3~4に集中している。したがって、3競技ともほぼ平均レベルという結果になった。しかし、動体視力においては4つの能力の中では最も低い結果となった。

競技別で比較すると、4項目でいずれもフェンシングの結果が体操・自転車の結果を上回るようになった。また、経験年数や競技レベルで比較すると、経験年数が長ければ長いほど競技レベルが高いものほどスポーツビジョン能力も高いという結果にはならなかった。

【考察】

今回の実験では、なかなか思うような結果が導けなかった。この結果より言えることは、競技の特性によって使うスポーツビジョン能力も違い、「慣れ」や「感覚」というものも関わってくるということである。トップアスリートは自分のありとあらゆる面において向上を試みるが、他のものはトップアスリートとなるために技術の向上を第一と考えるからである。今の流れでいくと、技術が一番でその他は後回しといった感じだが、成長する段階であらゆ

る方法を取り入れられれば一番いいと思ったのである。

【結論】

競技差を比較するといずれもフェンシングが勝る結果となりスポーツビジョン能力においてはフェンシングの能力値が高いという結論になった。ただ、経験年数や競技成績で分類したものをさらに競技別で分けると、体操部や自転車部がフェンシング部に勝る部分もあった。フェンシング・体

操・自転車それぞれの競技にスポーツビジョン能力は必要なことがわかった。しかし、どのスポーツにおいても眼から入ってきた情報を理解して実行に移すといったように動いたときにはすでに遅く、相手の動きをある程度予測し瞬時の反応が大切なのだと思う。このスポーツビジョンの研究ではまだまだ技術・技能の発展が必要なのだと感じた。そして経験年数、種目、競技レベルのいずれの項目においてもスポーツビジョン能力に影響を与える要因にはなりえないことがわかった。